

ケネー『經濟表』の構造

— ケネー經濟學素描 (二) —

小 林 時 三 郎

既述の如く、ケネーの經濟理論は、實際經濟の分析に立脚したもつとも現實主義的研究であつて、時代の具體的問題解決への努力を表現したものであつた。やがてそれは、一七五八年、その總括として、ミラボウによつて人類の大發明の⁽¹⁾としてたたえられた「經濟表」として結実した。しかし、この「經濟表」は、かれ自身の説明によれば「經濟秩序の基本表を作製することに努めたもの」であつて、「その表においては、一目瞭然と支出と生産とがあらわれ、政府がここに惹き起す整備と混乱とを明白にのみとること」⁽²⁾を目的としたものであつた。ただし當時においてはフランス絶対主義下の財政紊亂と農業の衰退愈々甚だしさを加え、これが改革案とが提唱されていた。しかしそのためには、合理的な所得分配の理論が確立され、一國民經濟總体における富の生産、流通、分配および消費の規則正しい循環過程が明かにされていなければならなかつた。ケネーは、これを、その天才的着想によつてわずか一葉の表のなかに「經濟表」として要約したが、それは、資本制的生産の最初の体系的把握をなしとげることによつて、まさ

しく科学としての経済学の生誕を意味するものであった。

- (1) V. R. Mirabeau; *Philosophie rurale*, 1764, Amsterdam, Tome. I. pp. 52—53. A. Smith: op. cit., p. 643. 大内訳 (四六三頁)。またミラボウは、「同書で、「経済表」を「経済学の要略であり基礎」 le précis et la base de la science économique」と要約を与えている (p. 3)」。ケネーの傑作「経済表」をたたる学徒の態度は、疑いもなく誇大な讃美のそれであった。経済学の全歴史上、宗師の教説への忠誠さにおいてこれと類するものとして、マルクス主義者とマルクス、ケーンズ主義者とケーンズとの関係あるのみである。しかし、ケネー経済学体系に対する批判がなかったわけではない。否、当時において強烈な批判が加えられていた。それらの代表的なものに、François de Forbonnais (1722—1800), The Abbe de Mabey (1709—1785), Voltaire (1694—1774), The Abbe Galiani (1728—1787) 等がある。

- (2) G. Welterse; op. cit., p. 62. シェル・山下訳・前掲書・一五四頁

- (3) ケネーは、経済学の幼年期に当って、社会的総資本およびその再生産の説明の可能について一点の疑点をもいだかなかったこれは卓越した見解であった。なんとすれば、再生産論は、社会的総資本のみの再生産にかんしているからである。その意義について、ローザ・ルクセンブルグはいう。「国民経済学とブルジョア経済体制の黎明時代に、模範的な大膽さと素朴さとをもって問題に近づいたところの重農学派の始祖ケネーは、実在的な、活動する大きさとしての総資本の存在をもって、文句なしに、自明のものと考えた。かの有名なマルクスに至るまでは唯一人として解きえなかった「経済表」は、小数の数字のうちに総資本の再生産運動を叙述している」。「社会総資本の再生産の問題の提起は、理論国民経済学にかんするマルクスの不朽の功績の一つである。われわれは、国民経済学史上、この問題を正確に叙述しようとするただ二つの特記すべき試みに遭遇する。それは、即ち、国民経済学の劈頭における重農学派の始祖ケネーにおいて、その終熄におけるカール・マルクスによる試みとである」。Losa Luxemburg; *Die Akkumulation des Kapial*, 1923, Gesamte werke Bd. VI., S. I. SS. 16—17. 高山訳 (上)・二頁、二二—二三頁。なお、ツガン・バラノウスキー・鍵本訳「英国恐慌史論」・二

- (4) K. Marx; op. cit., Bd. II, S. 361. 長谷部訳・第二部・四六八頁

しかしながら、「経済表」にもられた経済秩序は、当時のフランスの現実的経経秩序を経験的に分析した結果えられたものであつたにも拘らず、それが自然法に基く理想的経済秩序の形態をとつたことから、そこにあらわれる経済理論乃至経済概念は、現実にはそのまま妥当するというよりは、むしろ一種の理想的形態をとつてあらわれる。即ち、ケネーにおける全理論体系は、当時のフランス経済の具体的諸事実に対する実験と観察に基く帰納法的研究の結果えられたものであつて、決して哲学的形而上学から演繹されたものではなかつたにも拘らず、このようにして獲得せられたケネーにおける自然法乃至自然的秩序の概念は、神によつて與えられた不易不変の理想的経済秩序の形態をとることによつて、かれの全理論体系に対して、「一の非科学的な目的論的相貌」を與えたのであつた。かれにあつては、經驗的な経済現象の背後乃至根底に、絶對的、不可變的、普遍妥当的な自然的秩序の社会が、神によつて與えられた一種の格率の形をとつて想定されていた。さらにいいかえるならば、ケネーにおける「経済表」の社会秩序は、かれの想定する理想社会が資本主義社会として完成される趨勢を自然的必然的と観じ、これが絶對的な形而上学的性格を賦與せられたものに他ならなかつたのである。かかる意味において、ケネー経済学の総括たる「経済表」は、國民経済総体における富の循環過程が、「いかにして、自然的秩序 *Ordre naturel*」という義務的理念に準じて進行すべきであるかということを研究するもの⁽¹⁾であつたといふであらう。

- (1) J. Schumpeter; op. cit., S. 44. この点について、アルフレド・マーシャルは、「かれら（重農主義者）は、倫理的原理と因果法則とを混同した」と批判を加えている。 A. Marshall; *Principles of Economics*, 5th. ed., 1907, p. 756.

大塚訳・第一分冊・三二三頁。ケネーが、フランス経済再建のために理想的なものとなしたのは、イギリス的な大農経営に

基く資本主義的農業が最高度に行われることであつた。かかる農業は、科学的新農法による農業生産力の増大と結びついており、当時イギリスにおいては、事実、資本家的借地農の剰余価値を著しく増大するとともに、やがて地代を高める結果をもたらした。ケネーにおける自然的秩序の概念は、かかる資本主義的農業がフランス全土に行われることを理想状態となすものであつたが、しかし当時においては、フランス全土の一部、即ちその六分の一乃至七分の一の地帯に行われていたにすぎなかつた。それは、ケネーにとつて未だ実現されざる理想の経済秩序に他ならなかつた。この故に、ケネー「経済表」は「一の非科学的な目的論的相貌」を与えられたものと解することができよう。しかし、ケネー自身は、その学徒に比し「非哲学的頭腦の持主」(ゾムバルト)であつたのであり、その全思想体系の核心は、自然法的形而上学的要素から全く離れてゐることはすでに述べた。ゾムバルト・小島訳「三つの経済学」・五三頁。

なお、社会秩序が自然的秩序として通用しうるのは、当該秩序が自然的秩序として見える限り、即ち予測可能性が存在する限りにおいてである。もしもその社会における政治的安定性乃至平衡生が著しく損われ、社会的変動が顕わに現象するに至るならば、もはやその社会の根本規範が自然的秩序乃至自然法であるという基礎づけは一般的受容性を喪失するであらうこの点についてミユルダールは、ケネー自然法の立場をもつて保守的なものと解するが、しかる限り規範は現実そのものである故にそこには革命性が拒否せられることとなる。これ、マルクスがその革命性に意義を見出すのと反対である。なお、ケネー自然法が中世スコラ哲学のそれと異なる点は、それが歴史的に条件づけられた財産制度の如き特定制度に直接適用された点であらう。G. Myrdal: op. cit., p. 52.

ところで、「経済表」初版は、一七五八年ヴェルサイユ王宮内の印刷所で四部だけ印刷された。これ、ルイ十五世自らその校正刷に手を加えたと伝えられている。しかし、これは当時世にあらわれず、かれの学徒ミラボウによつて民衆化せられた⁽¹⁾。しかるに、ケネー自身の手になる草稿は、一八九〇年シュテファン・パウエルによつてパリの國立文書保管所に保管されていたミラボウの文書中に発見され、一九〇二年オンケンの「経済学史」にはじめて複寫掲載

せられた。(2)その他、第二版、第三版の一部など種々のものが発見され、多くの比較研究が行われた。(3)これらの「経済

表」の間には若干の形式上の相違はあるが、いずれも皆大形の二頁の図表でありその構想において軌を一にしている

(1) V. R. Mirabeau, l'Ami des Hommes の第六巻 Tableau Economique avec ses Explication, 1760. がそれである。

(2) A. Oncken, op. cit., SS. 324—325. このオンケンの複写版が、グレーの前掲書に掲げられている。A. Gray, op. cit., p. 107.

(3) その他、一七五九年第三版三部印刷されたものが、一八九四年 The British Economic Association によって出版され、キヤナン版スミス「国富論」の「編者序言」に掲載された。第三のものは、一七五九年印刷されたと伝えられる第三版の一部がデュスタヴ・シエルによって発見されている。シエルは、これを決定版なりとしている。

また、ミラボウの「農業哲学」Philosophie rurale, 1763. および「農業哲学概要」Element de la Philosophie rurale, 1763. のうちに収められているものなどある。この最後のものは、オンケンの前掲書(三九四頁)に転載されているが、おそらくケネー自身の手になったものといわれる。

しかしながら、「経済表」は甚だ難解であり、その簡易化民衆化は、当時一般の要求であつた。「経済表」の実践的性格は、最高度の明哲さを要求したのである。これらの要求に應えてケネーは、一七六六年「経済表の分析」

Analyse du Tableau économique と「重要考察」Observations Importantes とを著し、学派の機関誌「農業商業財政雑誌」六月號に発表した。これによつてケネーは、「かれの学説に一つの基準を與え」、「ややもすれば中心を離れんとするミラボウの偏向を防衛した」のであつた。(2)しかし、この「分析」の中に挿入されたものが、いわゆる「経済表範式」Formule du Tableau Économique であつて、前述の諸表に「原表」Tableau fondamental と區別する意味におつて「略表」Tableau abrégé と稱せられる。(2)それは、六つの出発点と歸着点とを結ぶ五つの線が

らなる。

- (1) 外科医ケネーの経済学が、その職業に相応しく社会医学の観点に立っていたことはすでに述べた。ケネーは、社会を生きた有機体として取扱ひ、そこに、健全な状態と病的な状態とを区別した。そこで社会には衛生学と治療学とが適用され、前者は社会が健全であるばあい、後者は社会が病氣になったばあいに必要とせられた。しかしこの社会の健全な状態は自然的秩序となされ、もしこの状態から離れ、病的状態に陥るならば、啓蒙君主が教師たり医師たる役割を果さねばならぬ。社会を治療し自然的秩序に帰さねばならない。ケネーにあつては、自然的秩序とはブルジョア的生産関係を意味したのであつて、ここに資本主義的進化の方向への「上から」対応が見られる。ケネーは、資本主義農業の発展を封建君主なくして考えることができなかった。これ、マルクスのいわゆる「いつわりの封建的外観」である。ローゼンバルグ・前掲書・一二五—一二七頁参照。

またかれは、英人ハアヴェー W. Harvey 1578—1657 の血液循環の理論（一六二八）を知悉し、これに關説している。「経済表」の構想は、このハアヴェーの理論と無関係ではないと思われる。この点を強調するのはドウニである。H. Denis, *Histoire des systèmes économiques*, Vol. I, p. 83., *Gide = Rist; Histoire des doctrines économiques*, 1920, p. 9. 宮川訳・一二頁。H. Wagendüf, op. cit., S. 69. 俾峻義等訳「血液循環の原理」（岩波文庫）。

- (2) その意味において「「略表」は最終の目的としてではなく、むしろ「原表」の説明のための中間的手段と看做すべきものである」。ウッグによれば、ケネー自身も「分析」において、かかる見解をもつ。H. Wood: *The Tableau Economique of F. Quesnay*, 1950, p. 9.

そもそも「経済表」が直接圖示しようとするところは、一國民経済總体における生産および分配の秩序である。しかし「原表」は、富の循環過程を地主階級の所得の再生産を中心として考察したのに反して、「略表」においては、

生産階級の「耕作費」richesses d'exploitation、即ち経営資本の再生産に重点がおかれており、また「原表」が地主、生産、不生産の三階級間富の循環過程を、それぞれの階級に属する個人間の個別資本の流通として表示しているのに対して、「略表」においては、同じ階級内部における個別資本の流通は捨象され、これら三階級間の社会的資本の総体的關係として直接に表現されている。ローゼンベルグも述べる如く、まさにこの点にこそ「略表」の最大の理論的意義が見出されるであろう。⁽¹⁾しかしまた、「原表」において一再生産年度内に漸次的部分的に行われるものとして示された過程が、略表においては一時的総体的に、即ち一再生産年度全体を一括する流通行為の形で行われるものとしてあらわれる。⁽²⁾要するに、「略表」は、「個別的現象でなく大量的現象を、社会の経済の一断片でなくその全体性におけるこの全経済」⁽³⁾を考察したものであつた。さらに「原表」にあつては、生産階級の「原前払」とその補填並に不生産階級の「年前払」の補填が表示から洩れているのみならず、貨幣の生産階級への回流も完結していないのに反して、「略表」においては、かかる關係がはるかに明瞭となつたのである。

このように、その名稱に相應しく、「略表」に至つて「経済表」が著しく簡單化され、かつ体系化せられるとともに、より包括的となつたのである。それは「原表」の内容を單に省略したものでなかつたのである。しかも他方においては、「略表」によつて示される分析用具を利用することなくして複雑な「原表」の内部機構の理解は容易ではない。それ故に、以下においては、先ず、より完成されより簡明な形式をもつところの「略表」によつて「経済表」を考察することとする。⁽⁵⁾

(1) ローゼンベルグ・淡・直井訳「資本論註解」・(三)三七五頁。

(2) 「無数の個人的流通行為は、直ちにその固有の社会的な大量運動において——大なる機能的に規定された経済的社会階級の間の流通におこつて——総括される。」K. Marx: Theorien über den Mehrwert, Dietz=Ausgabe, Bd. I. S. 86. 向坂訳

「剰余価値学説史」第一巻八八—八九頁。

- (3) K. Marx; *Das Kapital*, Bd. I, s. 48. 長谷部訳第一部(上)(レーニン「カール・マルクス」)・五一頁。

(4) それ故に、「原表に脱落している生産階級の原前払の利子と不生産階級の前払の運動とをそれに追加すると略表になる」といわれる。越村信三郎「ケネー経済表の研究」・一二八頁。またこの点については、すでに山田盛太郎教授が、「原表は、再生産論上、重大な留保を包蔵する。既述の、原前払並にその補填を表示しなかったこと、これである。飛躍的一步はこの一点にかかる。そしてそれは、範式のうちに見るをうる。ケネーの範式を一個の完成形態であるとするのは、これに基く」と透徹した解明を与えている。山田・前掲論文・二八—二九頁。

(5) 「『経済表』の実践的性格は、最高度の明哲さを要求する。この目的のために、ケネーは、『経済表』の循環を単純化し、若干の複雑した細目を取除いて、収入の消費過程をより鮮明に示したのである。」H. Woog; op. cit., p. 68. このウッゲの著作を中心とした「原表」の考察については、別稿にゆずる。ウッゲは「略表」のみをもってしては、「原表」に内在する機構を簡明することができないと考える。

十八世紀半ばケネーの時代には、フランスの農村にも新しい事態が進行しつつあり、従来の牛耕を主とする小農経営に代つて、馬耕による合理的能率的な大農経営が、北部その他若干の諸州に移入せられて、大地主に有利な資本主義的借地農業を営む地盤が次第に形成されつつあつた⁽¹⁾。

(1) ここで第一節「序説」の叙述を若干補足したい。ここに大農経営とは必ずしも大土地所有を意味するものではない。当時フランス農業は小土地所有が支配的であり、経営においても零細経営が圧倒的であつた。大土地所有は当然に大資本をもつた大農経営を意味するものではない。むしろその反対が一般的であつて、直接地主経営におかれる稀少のばあいを除く他は分割貸与されて、小土地片によって定期借地による農民経営に委ねられるを常とした。ただし、未耕作の大規模所領については、借地農による集約的近代農業が主張せられた。ケネーの主要関心事は土地所有の大小ではなく、大農経営か小農経営か

という経営形態乃至経営規模の問題であつた。かれによれば、大農経営とは馬耕による借地農の比較的集約的な経営を、小農経営とは牛耕による分益農の著しく粗放的な経営を意味した。しかし、大農経営の絶対的支持者としてあらわれたケネーは、小農経営＝小土地所有の主張者たちから一致して反対を蒙つた。K. Marx: *Das Kapital*, Bd. II S. 361. 長谷部・四六八頁。しかし、耕作への馬の使用が問題とせられ、馬耕が、そして輪作農法に基く小麦耕作が「大農経営のシンボル」となつたのは、飼料の問題と密接な関連をもつていた。馬の飼料は、燕麦を主とするが、それ以外では小麦藁を好適とするしかるに大農経営では、以上の他に豆科作物の収穫があるから耕馬飼料として殆ど乾草を要しない。三圃式経営のばあい、その経営地の三分の一に、燕麦その他春蒔穀物を作り、馬はその四分の三を消費する。これに反して牛耕では、能率上頭数多き必要とするのでその収穫物のより多くを消費してしまう。しかも燕麦の収穫物は馬耕のばいよりも四分の三だけ少ないので結局、その消費の後に残るものは、馬耕のばあいの半分にすぎない。この飼料上の利益が大農経営をして、他の家畜の購入資本の余裕を生ぜしめるとともに肥料供給上（馬の肥料は牛より優秀）にも多大の利益を与えることとなる。このことがまた英国馬にたいする讚美ともなつてあらわれる。ケネーは、イギリスにおける養畜上の利益に關説し、羊毛の生産高だけでも一億六千万リーヴル以上と評価している。Quesney: *Oeuvres*, pp. 167—169, p. 174. [全集] Ⅱ・一—一四頁、二一頁。André J. Bourde: *The Influence of England on the French Agronomie, 1750—1789*, 1953, pp. 98—99, p. 132, p. 121. 以上のように有利であつたにも拘らず、生産物地代を基本的な地代形態とする封建的土地所有、およびこれと共生する前期的資本の勢力が、未だイギリスの大農経営の確立にとつて大なる障害をなしていた。経営耕地の集中と共同地の分割は、フランス農村社会の最大の変化を意味したのであり、それ故にこそ、この大農経営の主張者デュアメル・デュ・モンソウさえも、余りに大なる土地の再分割の有害なることを憂えたのであつた。従つて、ブルジョア貴族の英国風模倣の著しい増大にも拘らず、「かれらの大部分の現実主義は、自己の個人的利益乃至封建的貢租の強化という考え以上に多くをでることはなかつた」のである。Bourde: *op. cit.*, pp. 101—103, p. 214. なんとすれば、アンシアン・レジーム未

期に至るまで、生産物地代が農民負担の基本形態として生き延びており、従って、封建的土地所有者にとっては、生産物地代確保の前提は「農民的土地所有」の存続であった。それは、封建構造そのものが拠って立つところの基礎であったからである。しかして当時において、生産物地代貨幣地代および絶対王政への金納地租が並存していた。しかし、農民に商品生産者としての適応の条件なくして、いわば「上から」貨幣地代が創出されるばあいには、伝来の生産物地代に本格的にとつて代ることはできず、この両形態は混在してあらわれるのみでなく、しばしば生産物地代へ再転化される。

しかしながら、以上の如き大農経営は、独立自営農民層を母胎として、地主層の利害をもまきこみつゝ「下から」自主的に進行しており、そこから本格的な借地農業資本家が姿をあらわしつゝあった。これ、封建関係の完全な廃棄を發達の前提とする「下から」の資本主義的發展の途であつた。そこには、農民層の兩極分解が進展し、一方における富農層と他方における貧農層とが分出されていったのである。他方において、上述の如く、一部地主層がそれに歩調を合わせ、生産物取引（対外輸出）と地代高騰を併せねらいつつ近代的地主に変容しつつあった。一七六〇年代のフランス農業は自由貿易に利益を感じていたのである。共同体的諸權利の制限、囲込の自由は、かれらのイニシアティブによるものであり、これが小農民並に貧農の利益と対立したが前期的商人層と結びついて、穀物取引の自由、穀物関税の撤廃、貿易の自由等の政策を主張したそれは、封建的土地貴族、大借地農業家を中心とするいわば「封建的反動」の新たな姿容に他ならなかつたのである。ここに二つの途のからみあいが見られるが、それは、「領主経済における交換の發展」（コスミンスキー）即ち、国内的並に國際的規模における「商品貨幣経済」への「上から」の対応であつた。これこそ、既述の「つぶれゆく農業者の立場」であつたのである。かれらは、封建的土地所有を自己の存立の基本的前提として最大限に確保しつつ「上から」ブルジョア化していったのである。このいみにおいてならばローゼンベルグの「ケネーは、ブルジョア生産関係が封建秩序を破らぬように、封建秩序を若返させようとした」（前掲書・一二八頁）との立言を理解できるであらう。かれらは、執拗に「上から」の途を貫徹を目指したが、富裕な農民層＝独立自営農民層が「下から」広汎な展開をし、やがてかれらが、フランス革命を維持

し推進させる基本的な力として作用するに至るや、その強力によつて圧倒され、革命の過程において封建的土地所有の全機構的破壊が達成されるのである。結局、ブウルデによれば農業近代化に重大な位置を占めるのは、富裕の地主と富裕な借地農であつた。高橋幸八郎「市民革命の構造」二〇—二五頁、「近代資本主義の成立」・一五頁、横山正彦「ケネー農業資本主義論とその歴史的意義」J・九—一八頁、中木康夫「絶対王政と資本主義の発展」（大塚久雄編「資本主義の成立」所収）・二二〇—二二二頁。F. A. Kosminski; *Services and Money Rent in the 13th Century*, 1935, p. 152. M. M. Postan; *The Chronology of Labour Services*, pp. 202—203. 早稲田大学経済史学会編「イギリス経済史研究資料」所収。A. J. Bourde; *op. cit.*, p. 96.

以上の如くにして、一七五〇—一七八九年の時期は、新農業理論と新生産技術の試みられた近代フランス農業の開拓期であつた。それは改革への偉大な熱狂の時期であつたが、疑いもなく実り多き結果をもたらさなかつたのである。それはまたフィジオクラシーの命運を暗示するものでもあり、「その活動は、一七五六—一七七八年のわずか二〇年の間しか継続しなかつたのである」一七八〇年代には、専門家を除いて、フィジオクラシーをすべてのものが忘れ去つていた。

A. Bourde; *op. cit.*, p. 214. J. F. Bell; *A. History of Economic Thought*, 1953, p. 121.

ケネー「経済表」が第一に前提するのは、以上の如き資本主義的借地農制およびそれに伴う大農経営が、かれの想定する、自然法に適合し所有の絶対安全が確保せられる一大王國において一般的にかつ最高度に行われるということであつた。しかし、かかる王國においては、完全な商業上の自由競争が行われて、商品価格が静止状態に落ち着き、恒常價格 *prix constantes* が成立する。⁽¹⁾ かかる状態においてはじめて、流通の各過程に生ずるすべての障害が除去せられ、富が年々規則正しく再生産せられる單純再生産の過程が明瞭に把握せられるものとなる。

(1) *Quenay; Oeuvres.*, p. 309. 「全集」J・二二三—二三四頁。資本制的に生産される各商品の価値 w は、 $w=c+v+m$ の

範式であらわされる。これは、労働手段の磨損分、生産材料並に労働力等の資本支出に剰余価値を加えたものである。この *cost* は「代置価値」(Ersatzwert) に他ならぬ。ケネーのばあい、自由競争のもとでは農産物が「原前払」の年損耗分(利子)と「年前払」に「純生産物」を加えたものが価値通りの売買と考えられていると解すべきであろう。ただし、ケネー「経済表」の理想状態においては、農業が最高度に発達していて絶えず「純生産物」がもたらされる。そのためには、恒常な良価 *bon prix* の状態が保たねばならぬ。この良価は、根本価格 *prix fondamental* 、「生産のため或はその準備のため支出せねばならぬ支出」よりは常に高くあるべきものと考えられていたからである。即ちそれは、根本価格は「純生産物」を加えたものであった。つまり、良価は、「経済表」の自然的秩序の世界において、農業生産物が五十億という価値を実現するための条件として、従って、純生産率一〇〇% といふ状態の継続にとって不可欠の条件として存在するものであったそれは、「原前払」の年々の償却と「年前払」とを十分に補償して年々一〇〇%の純収益の社会的再生産を可能ならしめる価格であった。但し、工業品は、原料に工作期間中の労働力の価値を加えたものが価値通りとされていた。

しかし、このように想定せられた一大農業王国フランスにおいては、ケネーによれば全耕地三千六百万アルペンと推定され、うち、六―七百万アルペンが大農経営、三千万アルペンが小農経営で耕作される。Quesnay, op. cit., p 171. 全集(三)・一七頁。

次いでケネーは、資本主義的農業社会を抽象的に、いわばその純粹性において考察するために、外國貿易を除外して國內取引のみを考察の対象とする。けだし、外國貿易はその詳細が不確定かつ計算しえられず、しかも自由競争の状態においては、貿易國相互間に損得なき等價交換のみが行われるものと考えられたからに他ならなかつた。⁽¹⁾ それによつてまた重商主義の陥つた、國際商業に由來する擾亂的要素を排除することができると考えたからであつた。

さらにその他の前提としては、個々の階級の内部でのみ行われる一切の流通は除外せられて、ただ階級と階級との間の流通のみが考察されていること、また経営年度内に行われる階級と階級との間の一切の賣買は、それぞれ單一の

合計として総括されていること等であつた。⁽²⁾しかしそのばあい、國家による祖稅が、地主階級の收入に地代にのみ課せられることを不可欠の條件としている。⁽³⁾

(1) 「外国貿易の自由競争の状態においては、一方または他方の損もなく、等しい価値と価値との交換があるにすぎない」。

Quesnay; op. cit., p. 321. 「全集」(三)・二五〇頁。重商主義にあつては、剰余価値は相対的であるにすぎず、一人のうるところは他人これを失う。「一方の得はもう一方の損」(モンテーニュ)である。従つて、一国の内部において總資本を考ふるばあい、實際上剰余価値は生じない。それはただ一国の他國に対する關係においてのみ起りうる。即ち重商主義にあつては、富の源泉となりうるものは外国貿易のみであり、しかも貿易バランスが出超を示すばあいに限られる。しかし、土地乃至農業をもつて富の唯一の源泉と考えるところのケネーにとっては、絶対的剰余価値の形成を拒否する重商主義の見解は誤謬かつ不合理なものであつた。ケネーにあつては、富を生産する *produce* のは農業のみで、商業はもうける *gagner* が富を生産するものではない。それは価値を實現するがなんらその価値額を増大するものではない。従つてそれは有用であるが生産的ではないのである。つまり、ケネーにあつては、等価交換の法則にかんする理論が全体系の基礎であり、起点となつており国内商業のみならず外国貿易においてもこの理論が貫かれるものとなされていたのである。なお、ケネーにおける、「商業は等価と等価との交換である」との見解は、やがてそれが生産物と交換されるものは生産物であるという意味にも転化することによつて、セイ J. B. Say 販路の理論の原型となる。平瀬己之吉「古典学派の解体と発展」・二六二—二六三頁、横山正彦「フィジオクラート等価交換論と賃銀論」(舞出教授還暦記念論文集(一)所収)参照。

ところで、資本制的生産の成立のためには、「發展した商品流通が一定の高さに達している」こと、いえかえるとそれが外国貿易にまで發展していることが前提条件である。さればこそ、ケネーにおいても、「その領域内だけでその住民の享樂に適したすべての富を産出するような王国というものは全く存しない」のである。しかるに、外国市場の捨象が再生産論に

において前提されるのは、外国市場乃至外国貿易を考慮に入れることによって、社会的総資本の再生産および流通の過程が明確に、つまり純粋性において規定されないからである。これは、外国市場をも一国の国内市場との区別をなくし、単一の国内市场として取扱うことに他ならない。即ち「邪魔になる附随的諸事情から引離して」、「全貿易界を一個の国民と看做し資本制的生産が残る限なく確立して一切の生産部門を征服していると前提する」(マルクス) ことであり、さらには、「世界のすべての国を単一の経済的全体へと結合する」(レーニン) ことに他ならない。再生産の法則は、この単一の市場において貫かれる、なんとなれば、外国貿易によつては、外国商品によつて国内の財貨が填補されるにすぎず、その価値比率は従つて、「生産手段および消費手段なる二つの部類が転態されあう価値比率も、これらの各生産物部類の価値が分たれうる不変資本、可変資本、および剰余価値の比率」も、影響を蒙らないからである。K. Marx; *Das Kapital*, Bd. I, S. 474. 長谷部訳第二部全・六二六頁、レーニン・大山・西訳「ロシアにおける資本主義の発展」(岩波文庫)(上)六六頁 F. Engels; *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*. 「反ヂューリング論」(マル・エン選集第十四巻) 因みに、この第二編第十章はマルクスによつて書かれたものである。

- (3) Quesnay; *op. cit.*, p. 313. 「全集」(三)・二三七頁。また、ケネーの立場からして、小農経営が除外されていることはいうまでもない。

次にケネーは「経済表」の前提する一大農業王國において⁽¹⁾、富に対する機能に基づいて、生産階級 *classe productive* 地主階級 *classe des propriétaires* および不生産階級 *classe stérile* の三つに分類する。

- (1) K. Marx; *Theorien*, Bd. I, S. 86. 向坂訳・八八—八九頁、舞出長五郎「経済学史概要」(上)・六三頁、久保田明光「近世経済学の生成過程」・二三六頁 I. Cossé; *An Introduction to the study of political economy*, 1893, p. 267. ケネーにあつては、剰余価値をつくりだす労働者階級とその取得者たる資本家階級とが一括されており、その一括された階級が自らの消費以上に他階級に剰余生産物を生産するか否かを標準として、生産階級、不生産階級の区別を立てるのであ

る。ここに、農業Ⅱ生産階級、工業Ⅱ不生産階級の区別が生じてくる。工業では商業と同じく「純生産物」を生まないからである。越村教授が、ケネーにおける階級区別を農業と工業との社会的分業と解されるのはかかる意味においてであると思われる。しかしながら、農業生産物と工業品との交換を支配する法則については、その体系的叙述を見出すことができないのである。それは、価値並に貨幣の本質を見失ったことに起因する。越村・前掲書・二四頁。しかして、マルクスは賃銀労働者階級が不生産的なものせられ、表にあらわれない誤りを指摘している。(P.85)。向坂訳・九一頁。

生産階級とは、「土地の耕作によつて國民の富を再生させる」⁽¹⁾とこの階級であつて、かららは、地主階級から土地を借入れ、農業労働者を雇傭して農業を経営する。土地の直接的耕作者はこの農業労働者である。この階級こそはケネーの想定する一大農業王國において、全經濟運動の指導者たる農業近代化の主張者たちである。しかして、この階級が生産的と呼ばれるのは、その社会的地位は問題ではなく、ただこの階級のみが生産過程中に消費する以上の剰余、即ち「純生産物」を作りだすものと考えられたが故である。生産の推進的動機はこの「純生産物」の獲得に他ならぬ。またこの階級の富こそ「國民の力と繁栄とを作りける」源泉であり、一般國民の經濟的福祉の実現は、一にこの富の増大にかかつて存するものと考えられたのであつた。⁽²⁾

(1) Quesnay, op. cit., p. 306. 「全集」Ⅰ・二二七頁。この階級は、「生産的労働の直接的擧取者であり、剰余価値の生産者である。」K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 361. 長谷部訳・四六八頁。既述の如く、重商主義的失敗を批判し、

フランス經濟の再建を農業の発達のうちに見出そうとする革新的思想を受入れ、それを支えた社会的勢力は「大地主、資本家的借地農、富農を結ぶ農業近代化の主張者たち」つまりブルジョア化せる地主層とも称すべきものであつた、かれらは、その内部に複雑な階層を孕みつつも、農業生産力の増大と農業市場における価値騰貴の独占的受益者としてあらわれた。生産階級とは、直接には資本家的借地農を指す。

「経済的見地からするならば、農業「生産階級」は、最高の地位を占め、全国民の最高の考慮と保護とを要求するものである。」¹⁰」H. Woo; op. cit., p. 19.

地主階級とは、当時の支配階級であつた主権者、地主および十分の一税取得者（＝教会）からなる。かれらは、自ら生産に従事せず、ただその所有する土地を生産階級に賃貸することによつて、そのつくりだす「純生産物」の価値額を地代＝収入として取得し、それによつて生活する。従つてかれらは「剰余価値の單なる取得者」である。しかしかれらにも、自然法に従つて財産管理と世襲財産の修復のための支出とが果せられており、なおその上に後述の「土地前拂」を負担する。しかして、かれらが地代として生産階級から取得する収入の支出が「経済表」における経済循環の出発点となり、その割合が國民の富の再生産に影響を與える。

(1) かれらには政治的任務と経済的任務とがあり、政治的には國家の施政に参与し、社会の秩序を維持するに参与する。経済的には「土地前払」を支出し、「純生産物」を多からしめ、一般福祉への経済的貢獻に努める。H. Woo; op. cit., p. 18.

(2) K. Marx; *Das Kapital*, Bd. I, S. 361. 長谷部訳・四六八頁。

(3) Quesnay; *op. cit.*, p. 318. 「全果」(一)・二四七頁。

不生産階級は、「農業以外の勤務および労働に従事するすべての市民」¹¹よりなり、主として農産物の加工乃至販賣に従事する市民、即ち商人、手工業者、マニユファクチャ経営者、賃労働者等によつて構成される。かれらが不生産的と呼ばれるのは、かれらが不要乃至無益であるという意味ではなく、ただ「純生産物」＝剰余価値を生産しえずかれらの労働は、生産階級から供給される原料品の価値の上に、同じく生産階級によつて支拂われるかれらの生産資料を消費すると同じだけしか附加せず、なんらの「純生産物」を附加しえないからである。²要するに、かれらは素材を増加せしめず、その空間上の位置を變じたり、或はその形態を變じたりするのみであつて素材そのものは農業によ

つてのみ供給増加せられる³。しかしてかれらは、なんらの「純生産物」をも生産せぬのみならず、かれら自身生産し乃至はその価値を附加せる工業品をば自ら消費しえないものと考えられていることは一の誤謬となされている⁴。

(1) Quesnay, op. cit., p. 446. 「全集」Ⅱ・二二八頁。

(2) マルクス「反デューリング論」前掲書・四一七頁。Das Kapital, 長谷部訳第二部・二七三頁。かれらの生産物は主として

市場生産を目的としており、その一少部分のみが家庭内で消費されたということが、ケネーをしてその本質を見誤らしめたのであらう。J. S. Lewinski, The Founders of Political Economy, 1922, p. 41. 商業の不生産性については、

Quesnay, op. cit., p. 446. 「全集」Ⅱ・一七四頁以下参照。Gide=Rist, op. cit., pp. 15—16 宮川訳・一九一二頁

(3) ヘネーは、農業の中に、鉱業、漁業等の採取産業を含ましている。又、シイドーリストは、ケネーの農業の概念について

「一般的には鉱山にも及ばしたものと思われるが確度的証拠はない」と述べている。参照すべき点は少なく、確定的証拠は

なくとも、ケネーが生産的支出の中に鉱山や漁業への支出を含ましている点より考えて、鉱業、漁業なども農業中に含ま

しめるのが妥当であろうと思う。しかし、ミラボウが反対するまでもなく、農業は、「人間の助力なしに、人間の労働の一

般的対象として存在する」ところの土地を労働対象としているのに対し、これらの産業は、「労働によって大地との直接的

関連から分離されるにすぎぬ」ところの、自然的に存在する鉱石、漁業 材木等を労働対象とするものであるこというま

でござる。Hanay, op. cit., p. 182, Gide=Rist, op. cit., p. 16 宮川訳・二二頁。K. Marx, Das Kapital., Bd. I,

S. 186. 長谷部訳・三三頁。J. S. dewinsky, op. cit., p. 39.

(4) 「略表」にあつて、不生産階級がその生産物二〇億全部地主、生産階級に売り、その代り、一〇億を原料その他流動資本に

一〇億を消費資料に代えてしまうので、かれらはなんらの工業品も自己自身で消費しえず、ましてそこにはなんらの剰余価値も存在しない。これ明かに誤謬といわねばならない。樺田民蔵「ケネ経済表と唯物史観との交渉」(大原社会問題研究所

以上の三階級の他に、當時には、ケネーのいわゆる細民 *menu peuple*、貧民 *homme pauvres* および最下級民 *dernieres classes de citoyens* 等の社会層が多数存在していた。しかし、「経済表」が想定する一大農業王國においては、これらの社会層はなんらの富を生産せず、従つてまた、重農主義的意味において、社会的生産に対して積極的機能を営むところがないものと考えられ、「経済表」の中にあらわれなう。

- (1) Quesnay, op. cit., p. 335. 「全集」Ⅲ・一〇頁。オンケン・ヘネー等は、かかる階層をもつて第四の階級を構成するものとなつてゐる。A. Oncken: op. cit., S. 361. Hanay: op. cit., p. 187. リヤン・エチエンヌ・平舘訳「経済学説史」・四六頁。このように、「げんみつには第四の賃労働者の階級が存在するが、かれらはケネーの注意を殆ど惹かないのである」即ち、ケネーは理論的理由（上述）と政治的理由とからこの階層をもつて受動的役割を果たすものとして特別な階級に分けなかつた。かれらは、当時第三身分のうち貧民と称せられる部分をなしていたのである。ケネーは、かれに対して慈善的態度で臨んだのであつた。「最下層の市民階級の生計の程度を引下げてはならぬ」云々。J. F. Bell: op. cit., p. 130. A. Gray: op. cit., p. 104. ローランベルゲ・前掲書、一三〇頁。Quesnay: op. cit., 335. 「全集」Ⅲ・一〇頁。しかし、かかる階層は、「無一物で貨幣で雇われる日傭労働者」と規定するよりはむしろ久保田教授の指摘せられる如く、ミゼラブルな分益農を意味するであらう。ソブールもまたこの二つを区別し、「これら農業プロレタリアにすぐ接近して非常に多くの小農がいた」と述べ、この小農をもつて分益農とみなしている。この点についてマルクスは、イギリス農村分析の結果明快な示唆を与えている。「農業上の賃労働者は、一部分は、自分の余暇を大土地所有のもとでの労働によって利用した農民から成立ち、一部分は、相対的にも絶対的にも数の少ない自立する本来的賃銀労働者階級から成立つていた。後者も事実的には同時に自営農民であつた。というわけは、かれらはその賃銀のほかに四エーカーまたはそれ以上の耕地と小屋とを分与されていたからである。」果してブウルデも、フランスにおける日傭労働者が、しばしば一軒の小屋と小菜園、それに一二頭

の牛を所有していたと指摘している。しかして、かかる事態が、ジイド・リストをして「フイジオクラートは農業労働者について論じたことはなかった。農業労働者が当時殆どいなかったためではないかと想像される」との立言をなさしめたであろう。ここでは、賃銀労働者階級が否定され、小農にすりかえられている。ケネーのばあいは、自分の余暇を資本主義的大農場営のもとでの労働によって利用したときのみ「純生産物」がつくりだされるものと考えたのである。久保田明光、前掲書二五二頁。ソブール「フランス革命」(岩波新書)(上)、二二頁—二三頁、K. Marx: *Das Kapital*, Bd. I, S. 755. 長谷部訳第一部(下)、一〇九六頁—七頁、第三部、一一三〇—一頁、Gide = Rist; op. cit., p. 25. 宮川訳、三二頁。A. Bourde; op. cit., p. 35.

事実、アンジアン・レジーム末期のフランスにおいては、土地から完全に遊離された賃労働者も、また独立自営農民層も比較的僅少であり、庄倒的多数を占めるものは零細所有者農民であった。かれらは多かれ少なかれ日傭労働者として、または定期借地農、分益農としてあらわれるとともに、共同体的諸権利によって、生活必要部分および封建地代部分を再生産しなければならなかった。しかし、当時においては、資本の不足の故に分益農制が広汎に行われていた。かれらの分益農は、地主に人格的に隸属し、分益地代の他にしばしば金納の賦課租さえ加えられていた。それは、資本の殆どを地主が提供し、かれら分益農はもっぱら労働力を提供していたからであった。それだからといって、定期借地農のばあいでも圧制的でありその借地権は不安定であったことは、すでにアダム・スミスの指摘するところである。高橋幸八郎、「構造」一六三—三九頁。横山正彦「意義」、一一—一四頁、A. Smith; op. cit., p. 368. 大内訳(二)、二〇二頁。ウググによれば、これら階層は、次の労働者である。「かれらは、日給を受け、生産的並に不生産的部面に雇傭せられる自由労働者、官の雑役労働者傭兵および下僕等を意味している。」H. Wogg; op. cit., p. 20.

以上の前提に立つてケネーは、一國民経済給体における富の規則正しい年々の再生産過程が、流通によつていかに媒介されるかを明かにしようとした。しかし、そのさい、農業のみひとり社会の富を増進するが故に生産的であり、

商工業および運輸業においては眞の富は發生せず、従つて不生産的 *sterile* であるとなして、「純生産物」の概念をもつて根本の出発点となした。けれど農業にあつては、生産階級が年々消費する生活資料の分量がかれらの獲得する生産物の分量より少ない。即ち、勞働力の價值とその勞働力の使用による價值の増殖との間の差等が、農業にあつては可視的經驗的に素材として確然とあらわれる。それに反して、商工業にあつては、かかる過程が直接的に見ることができず、交換によつて、従つてまた交換價值によつて複雑にされている。價值の正しい科學的分析を必要とする所以である¹。かかる事態に照應してケネーは、農業のみひとり「純生産物」＝剰余價值をつくりだし、それ故にまた、農業勞働のみひとり生産的であるという基礎的命題を正しく提起したのであつた²。

(1) K. Marx; *Theorien*, Bd. I, S. 36. 向坂訳、三八頁—三九頁。また、モウリス・ドップは、「農業においては、毎年

ある一定量の小麦が人および動物に食料として支給され、ある一定量の種穀を土地に投下される。季末における穀物の收穫は、それを生産するために消耗されたものを超過する。この差が剰余價值としてあらわれる。」しかるに、「それが織物に支給される羊毛であり、職工に支給される麦粉であり、そして成果である羅紗であるばあいには、最初の量と最後の量との差等は、ただ価値によつてのみ表現することができる」、巧みな説明を試みている。M. Dobb; *Political Economy and Capitalism*, 1950, pp. 31—32. 岡訳、二九頁。かくして、重農主義者は、もっぱら農業に注意を集中し、かくてまた交換價值の問題をまったく無視することができた。それは、農業こそ、「流通および交換からまったく分離し獨立して考えられうるし、また人間と人間とのあいだの交換でなく、人間と自然とのあいだの交換を前提とする生産部門」であるからである。このように、ケネーは、交換價值の本質を明かにしなかった。その故に、富をもつて取引可能な財となし、単なる使用價值でなく、商品乃至交換價值物と概念したにも拘らず、結局農業生産物の創造乃至合計となしたのである。K. Marx; *Theorien*, Bd. I, ss. 35—36. 向坂訳、四二頁。E. Roll; *A. History of Economic Thought*, 1945, p. 131.

- (2) 「重農主義にとつては、地代を生む資本または農業資本は剰余価値を生産する唯一の資本であり、この資本によって運動させられる農業労働は、剰余価値を生む唯一の労働、つまり資本家的立場からすればまったく正當にも唯一の生産的労働である。」 K. Marx; *Theorien*, Bd. I. SS. 35—36. 向坂訳、三八頁。 *Das Kapital*, Bd. I. s. 834. 長谷部訳、第三部 一一〇五頁。

しかし、「経済表」を理解するためには、農業生産のための各種の「前拂」 *Avances* 即ち投資の意義が明かにせられねばならぬ¹。それには「土地前拂」 *Avances foncières*、「原前拂」 *Avances primitives* および「年前拂」 *Avances annuelles* の三種類がある。「土地前拂」とは、地主階級が土地財産の維持改良および耕作の増進、即ち土地の開墾、建物建造、灌漑排水、道路の開通等のためになす一切の支出であるが、「経済表」の数字の上には直接あらわれない。しがしこの「土地前拂」は、生産階級の総資本が拠つて依存するところのものであつて、「経済表」における地主階級の取得する地代は、この「土地前拂」に対する利子乃至償却費を含むものである²。

- (1) 前払とは支出に対する言葉である。支出は單なる購買のためのものであるが、前払は販売のための購買を目的とする。従つて前貸資本は利潤を伴つて回収される。しかして、テュルギーに至つて前貸の代りに資本なる言葉が常例的に使用されるがこの資本の理論こそ「重農主義体系の最も独創的部分の一つ」を構成する。 J. S. Lewinski; *op. cit.*, p. 42.

- (2) 櫛田民蔵、前掲論文、一八八頁。そもそも土地については土地物質 *terre-matière* と土地資本 *terre-capital* とを区別しうる前者は、土地実体そのものであり、その使用に支払われるものは未来の地代を構成する。リカードはこれを「土壌の本源的不可減的な力」と名づけ、それに対する対価たるものを本来の地代となし、土地資本への対価たる「利子および利潤」と区別した。スミスも土地物質に対する報償たる部分を純地代となし、総地代の概念の中に含ましめている。後者の土地資本は土地の改良のために、それに不可分に合体された資本で、固定資本の範疇に属し、これに対する対価は資本利子を構成する

ケネーの「土地前払」は、後者の土地資本に相当するが、これは土地を改良し、その生産物を増加させ土地を単なる物質から土地資本に転化せしめる。しかしケネーにあつては、上述の如き關係が明瞭に把握されていなかったし、また現実に生産的に利用されつつある土地について、どれだけが自然によつて与えられ、どれだけが人間によつて作られたかを區別することは實際上できないのである。K. Marx; *Das Kapital*, Bd. III. S. 667. 長谷部訳第三部(下)、八七三頁、「The works and Correspondence of David Ricardo, by P. Saffa, 1951, Vol. I, p. 67. マルクス「哲学の貧困」(マル・ニン全集第三卷)、五九二頁、なおこれらの点についての明快なる分析と論断については、平瀬己之吉「経済学の古典と近代」、七一頁参照。

「原前拂」および「年前拂」は、¹いずれも農業経営のために生産階級の支出する前拂であり、「原前拂」は後のいわゆる固定資本に相当し、農業生産に継続的期間にわたつて使用せられる農業用機械、器具、役畜等の生産手段であつて、「耕作の創設資本」²である。それは、一〇年を更新期とせられるが「略表」では「年前拂」を二〇億とする時にその五倍の一〇〇億として示される。従つて、年々この資本額の一割、即ち一〇億が資本費用としてあらわれる。ケネーは、これを利子と呼ぶが、剰余価値の分裂形態としての利子と同じ概念ではなく、後の償却費に相当する。しかし、これも單なる償却費ではなく、建物の維持費、家畜の更新費、凶作・家畜の疫病、水害等諸種の災害の積立金その他土地の改良と経営の拡張など農業生産力の維持発達のための保険積立金として用いられる。³

「年前拂」とは、後の流動資本に相当するが、生産階級によつて、主として「年々耕作的労働に対してなされる支出」⁵であつて、それは、毎年の再生産の過程中に略々全部的に消費され盡してしまうところの農民家族の維持、賃銀種子、役畜の飼料、簡単な農具などに使用されるものである。⁹

(1) ケネーにおける「年と原との區別は、充用資本の消費時間、従つて相異なる再生産時間における區別であつた」。またケネー

「は、この区別を「正当にも生産資本内部での区別として叙述し」、さらに、「この区別を、再生産過程およびその諸必然性そのものから誘導——中略——した」のである。 K. Marx; Das Kapital, Bd. I, S. 184, 194-223. 長谷部訳、六七八五、二九二頁。

- (2) 「原前払」は、また、経営上の富 *richesses d'expropriation*、経営上の元富 *fonds des richesses d'exploitation* 設定前払 *avances son établissement* 等の名称をもつて呼ばれている。 Quesnay; op. cit., p. 308, 313. 「全集」Ⅰ、二二八頁二三五頁、二四〇頁。

- (3) K. Marx; Theorien., Bd. I, ss 88—9. 向坂訳、八三一—八四頁。

- (4) ケネー資本理論撰取の上に立つアダム・スミスは、ケネーの「原前払」と「年前払」の区別を固定資本 *fixed capital* と流動資本 *circulating capital* の区別に一般化した。これに対して、マルクスは、スミスが、ケネーにおける生産資本内部の区別を、生産資本と流通過程にある資本の形態たる商品資本および貨幣資本との区別と混同した点を批判したことは周知の如くである。ケネーが、資本の区別を完成生産物への価値移転の様式に基づいて分類したことはすぐれた着眼であったし、また「原前払」を重視したことも、スミスが「*plus*」のドグマに陥つたことと対比して、これまた周知の貢献である。

A. Smith; op. cit., pp. 262—263. 大内訳Ⅰ、一—二頁。Das Kapital, Bd. II, S. 363—364. オンケン注「原前払」と年前払の区別を後の固定資本と流動資本の区別に相当すると述べているが、しかし、この区別をげんみつに解すると、「略表」における不生産階級から生産階級の「年前払」に向う一線に難点の生ずること後述の如くである。この「年前払」の中には、固定資本の償却の要素を含まなければならないのであろう。A. Oncken; op. cit., S. 362. なお、シユムペーターの遺著は、ケネー資本論をもつて、ジョン・スチュアート・ミルに至るまでの全資本理論の宗祖であると意義づけている。

- (5) Quesnay; op. cit., p. 310. Note. 「全集」Ⅰ、二三五頁。

ケネーにあっては、賃銀が「年前払」の中にあらわれてくる。この賃銀は、絶対的必要 *strict necessaire*、即ち「労働者の生活資料」(Oeuvres, p. 233)、「必需的な農産物の平均価格」(p. 211)、「労働者並その家族の生存資料」(p. 390)で定まる。即ち、賃銀は労働者の最低必要費によって決定されるという賃銀の生存費説がケネーの学説に包含または前提されていた。このばあいの生存費は労働者本人とその家族のそれであり、それがスミスへと流れ、古典的賃銀論の共通の二要素となったが、やがてマルクスに至るや育成費という第三の要素が加わった。この最低生活必要費 \parallel 自然賃銀(ヘネー・一九〇頁)を越えたものから「純生産物」は生ずる。即ち、総生産物から、この最低必要費と「年前払」および「原前払」の年磨損分とを控除したものが「純生産物」である。ここにヘネーは、後年のスミス並にリカード地代理論の控除的説明の原型を見る。しかし、スミス地代論はチュルゴーに相似性をもつであらうし、そもそもケネーには本来の意味の地代論はなかくれにあるものは、地代形態にある剰余価値学説であった。スミス利潤論こそ控除説であった。

ところで、ケネーは、価値そのものは本質は理解しなかったけれども、労働力が商品である事実、そしてこの商品の価値が生活必需品、従って一定量の使用価値において表現されていることを知っていた故に、労働力の価値を一定と定めることができたのである。しかし、それを不変なものと解したところに誤りを犯したとしても、資本家的剰余発生 of 賃銀の最小限度、従って労働の商品化に求めたことは、まったく卓越した見解といわねばならない。これによって資本制剰余発生の可能性が生じてくるのである。これはまた、ケネーが、「純生産物」は大農経営即ち賃銀労働者の存するところのみ存し、小農経営には生じないと主張することに照応する。この故に、賃銀最少限度はまさしく、「重農主義学派の基軸」であった。それはまた、当時の労働者階級の実情にも合致していたのである。但し、この点については、モリードの反対説がある。かれは、ケネーは、労働者がその最低必要費以上に生産するが故に「純生産物」が存在する、と考えていないことを主張している。たしかに、ケネー自身は、以上の如く意識することなく、従って理論的に明言せず、むしろ、当時の労働者階級の実情を与えられたものとしてただ記述したにすぎなかったであらう。しかし、ケネーの理論を究極にまでおしつめた

場合には、以上の結論になるのであり、さればこそ、「重農主義理論の最も発展したものを見出す」チュルギーにおいては労働者間の競争が、その所得を最低必要費に制限することを明言し、この最低賃銀の限度を越えて生産されたものから「純生産物」が定まるとなされたのである。

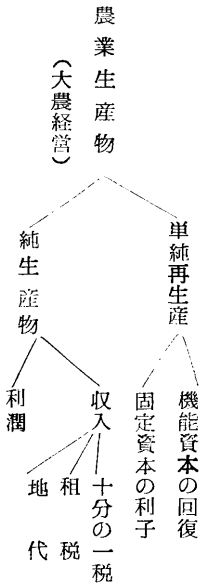
なお、オンケンにはケネーの中に後任のリカード賃銀法則を見、ローゼンベルグもケネーの根に価格の主要要素を労賃に求め、「純生産物」はこの労賃の大小により規定されると解しているが、ケネーの学説は未だリカードの提説に達していないとなっている。Hanay, op. cit., p. 182, 190, 294, A. Oncken, op. cit., S. 380, E. Cannan, Theories of Production and Distribution, 1917, pp. 182—183. 堀経夫「地代論史」・一五頁、K. Marx, Theorien, Bd. I, S. 35. 向坂沢「三八頁」Pierre Moride, Le produit net des physiocrates et la plus-value de Karl Marx, 1908, pp. 76—81. チュルゴウ・永田清訳「富に関する省察」・二七—二八頁。横山正彦「等価交換論」・一三五—一三六頁。なお、平瀬己之吉教授は、その近著において、賃銀生存費説はケネーにはじまると通説に対して、すでに一七三〇年代のヴァンダーリント五〇年代のカンテヨンおよびハリスにその明らかな形を見ると論破せられる。ただ、この最低必要費をもって剰余価値発生 of 根拠とする理論構成をとっているか否かが問題であると思はれる。同教授・前掲書・一〇三頁。

このように、ケネーにおいては、年前拂額二〇億と「原前拂」の利子一〇億の合計三〇億が耕作費であつて、「年々回收」*riprises annuelles* せらるべきものである。これが生産階級の回收 *LES RE PRISES de la classe productive* と呼ばれるものを構成する¹。これを総生産物から控除した剰余が即ち「純生産物」*produit net* となる²。これ「剰余価値の担い手たる剰余生産物」³に他ならない。もつとも、げんみつには、この「純生産物」の一部は、「土地前拂」に対する利子および償却費に相当し、その残餘のみが「自然の純粹の賜」*pur don de la nature* たる「増収」⁴ *surcroit* を構成することとなる。しかるに、これまた地主階級の取得するところなる。けだし、地主階級の支出す

る「土地前拂」なくして農業生産は行われず、従つて「純生産物」も生じない。それは、生産階級の総資本が拠つて依存するところのものであつて、地主階級が直接生産に従事せず、土地所有の上に立つてこれを生産階級に貸與するのみであるにも拘らず、土地資本の代表者たる生産階級に優越して「純生産物」を取得する權利を賦與せられるのは、まさしくこの「土地前拂」にその根拠を有するものといひうるであらう⁵。さらにケネーにあつては、地主階級は、自然法に従つて、「財産管理にかんする配慮と世襲財産の修復のための支出」とが課せられている。ここに、地主階級の土地所有権およびそれに基づく「純生産物」取得權は、神聖にして侵すべからざるものとなる。「地主こそ、神によつて生産階級に先立ち、一切の富の最初の配分者として認められたものであつた」⁶。このようにして、ケネーにあつては、地主階級即ち土地所有者が本來的な資本家として、従つてまた剩餘労働の取得者としてあらわれる⁷。

(1) Quesnay, op. cit., p. 312. 「全集」(二)・二三九頁。この耕作費の中には通常の利潤が含まれている。と解すべきであらう。

この利潤を越えたものが「純生産物」である。そもそも利潤は、資本家の手に帰するところの剰余価値部分であるにも拘らず、ケネーにおいては、一種のより高級な賃銀であつて、通常の労働者の賃銀と同じく流動資本の一部をなすと解せられている。K. Marx; Theorien, Bd. I, s. 37. 内田義彦、「経済学の生誕」、二二頁。末永茂喜「経済学史」、四五頁。しかるに「この点についてウッケの理解は次の如く一步進んでいる。先ずかれの分析図を掲げる。



この利潤について、ウグは「農業者の個人的利潤」なることを明瞭に指摘し、少くとも「胚芽的利潤」 embryonischer profit と解するものの如くである。これ、農民生産力向上の結果、かれらのもとに必要部分および地代部分以上に出ずる超過分に他ならない。かれら農民は、この自己の超過分なり、他人のそれなりを占取し可能性をもつようになるが、貨幣地代はこの可能性を増大せしめる。しかしこのはいなお未だ利潤は地代に制限せられ、その中に自己の自然的限界をもっている。しかして、農業者が、この胚芽的利潤を自己の手許に残しうという点において、封建関係否定の契機の起点が与えられる。なんとすれば、これによって地代と利潤と分離し、農業者の生産規模拡大の可能性が与えられて、「下から」の資本主義的發展の途が開かれるからである。この封建的危機に対して、「上から」の領主の対応としては、流通過程から間接的にこの剰余部分を把握吸収する手段が残されているのみである。

なお、この分析図は、「経済表」における現実の流通に先立つ分配の状態を示すものであり、全循環の出発点を表現している。しかるに、この第一次の分配と第二次の流通の両分野は、経済的不均衡を惹き起す可能性をもつ。それ故に、妥当適切な「実定的秩序」の規則が必要となる。H. Wögg; op. cit., pp. 21—22, K. Marx; Das Kapital, Bd. III, S. 849. 長谷部訳第三部(下)「一二四頁。

(2) Quesnay; op. cit., p. 308. 「全集」J' 二二八頁。

(3) K. Marx; Das Kapital, Bd. I, s. 501. 長谷部第二部全、六五二頁。剰余価値の範疇は、重農主義において最初に出現した。しかし、資本制生産の根本的範疇としての剰余価値の真の本性をあらわにした最初の人はマルクスであり、しかも、剰余価値の学説は、「マルクスの経済理論の土台石」となった。レーニン「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」(岩波文庫)「カール・マルクス」、一二二頁。

(4) ケネーにあつては、労働力の価値とその価値増殖との間における差額は、人間労働からではなく自然の生産力によるものとしてあらわれる。真の新たな富、即ち「純生産物」は自然の賜であり、自然の創造するところである。人間労働はかかる賜

を領有しうるにとどまる。しかし、この剰余は、自然に土地の所有者によって取得される。ところで、もしも労働者が資本の強制を受けず、自己自身の労働力の再生産に必要な時間のみ労働したとすれば「純生産物」は生じないであらう。しかるに、ケネーにおいては、労働者が労働する時間は与えられたものであって、この労働時間において、土地の生産性が労働者をして、かれ自身の生存に必要なもの以上に生産せしめるという点がもつぱら固執せられる。かくして、この余分が「自然の純粹の賜」としてあらわれる。ケネーによれば、「純生産物」は、大農経営にのみ小農経営には生じない。それ故に「純生産物」は賃銀労働者の存するところにのみ生ずるのに、社会關係の產物と解しない。しかし、チュルゴーに至つてはじめて、「自然の純粹の賜」は農業労働の一部として、剰余価値として常例的に叙述されるに至る。やがて、この剰余価値の性質は、土地所有耕作者 *propriétaire cultivateur* という前提が廢棄せられ、それとともに生産物の兩極部分たる賃銀部分と剰余価値部分とが分離し、それぞれ異なる階級に歸属することとなるやより鮮明に把握せられるであらう。しかし、かかる完全な分離は、チュルゴーに至つても完全ではない。なんとすれば、じつさに耕作に従事する労働者または耕作者をもつて賃銀のみならず利潤を取得するものとなしているからである。それにも拘らず、チュルゴーは、ケネー學說のブルジョアの核心を著しい程度において、その封建的外殼から引き出したのであった。K. Marx: *Theorien*, Bd. I, S. 41, 52. しかして、土地がその生産者維持よりもより多くの生活必需品を産出するということは、かのマルサス地代論においても再生産せられる。T. R. Malthus: *Principles of Political Economy*, 2th ed, 1836, p. 136.

ところで、資本制の生産においては、土地所有はなんら本来的でない。そこでの基本的対立は、資本と労働の対立である。土地所有はかかる基本的対立に対して後から入りこむ。そこでは地代は利潤の一分肢にすぎない。私有財産權の体系の中ではじめて土地所有は商品に転化され、土地所有の支配力は政治的粉飾をはらいおとして純粹の資本の支配力としてあらわれ土地所有は資本の形態をとる。しかるに、土地所有が生産關係における基本的対立の一因子として本来的に参加している事情のもとでは、地代は、剰余労働の唯一の、通例的な形態としてあらわれ、地代は利潤によって決定されるものでなく、むしろ

しろ利潤は地代の背後に生長し、かかる地代の中に自己の自然的限界をもつ。かかる意味において「資本の本来の利潤——地代自身がその分身にすぎない——は重農主義においては存在しない」 K. Marx: op. cit., S. 27. 向坂訳、三七頁。

- (5) J. F. Bell: op. cit., p. 131. このベルの説明はジイド＝リストに拠ると思われる。ところで「土地資本の代表者は、地主でなく小作人である。土地が資本として与える収入は利子であり、産業利潤であつて地代ではない」「哲学の貧困」、前掲書五九二頁。ここでは「土地所有者がまた土地所有の独占に媒介されて直接的生産者の超過労働を第一番に取得する人格」(「資本論」長谷部訳第三部(F)、『一一〇四頁』)として現象している。

- (6) Gide = Rist; op. cit., p. 25. なお、地代と租税の關係について。主権者は、全地主の利益を代表する大地主である、地主の私有地は元來この共有権の分割されたものであり、地主の租税はこれに対して支払われる。故に租税は地代の上に位している。しかし租税はもっぱら地代のみから支払われるので地代の一変種にすぎない。ただし、租税は「経済表」そのものの考察においては除外されている。

- (7) 以上の如く、ケネーにおいては、土地所有が本來的な資本家として封建的外觀をとつてあらわれる。即ち、土地所有者が基本的手段たる土地を独占して生産を指揮し、農業労働者の剰余労働を占有するものと解されている。政治的義務履行の面で不生産的であるにしても経済活動において生産的なのである。それ故に、地主階級をあえて不生産的となさず混合階級 *classe mixte* とも呼んでいる。しかし、このようなことは、農業の優越した当時のフランスに相応するもので、工業、商業航海業等の発達したイギリスにはこのことが見られない。「地代と利潤の分離こそ資本制生産様式的前提」なのである。

K. Marx: *Theorien*, Bd. I, s. 41, *Das Kapital*, Bd. II, S. 837.

三

「経済表の分析」によれば、生産階級は、「年前拂」二〇億、「原前拂」一〇〇億をもつて年総生産物五〇億を生産

することから出発する。このうち、「純生産物」としての地代を生み、また、固定資本としての「原前拂」の利子を生むところのものは、生産階級の所有する二〇億の「年前拂」という経営資本である。それ故に、「経済表」においては、「原前拂」の利子一〇億および「年前拂」二〇億の合計三〇億の前拂は、産業資本を形成する。しかして、年生産物は販賣せられて、経営資本を回収して純収益たる二〇億を地代として地主に支拂う。これまた全体としての社会的剰余を形成する。このように、「経済表」の想定する一大農業王國においては、年々の社会的剰余は地主階級に歸し、年々の社会的総資本は生産階級の所有に係るのであつて、人間の経済生活の一般的條件は社会の一部階級の占有するところとなつてゐる。ケネーにおける資本は、特定の社会関係、即ち資本制的生産に密接に結合する生産手段に他ならず、かかる関係においてその所有者に対して特定の剰余を生むに至る¹。しかし、ケネーにあつては、地主階級もまた「土地前拂」を支出し、それが生産階級の総資本が拠つて依存するところのものと考えられていることはすでに述べたところである。

しかして、地主階級は、生産階級より「純生産物」二〇億を地代として受け取り、これを各々一〇億宛農業品および工業品買入れのために生産階級および不生産階級に支出する。不生産階級は、前拂一〇億と地主階級より得た一〇億によつて工業品二〇億を生産すると前提されている²。この不生産階級の前拂一〇億は、前年度においてその前拂を回復し保有した「年前拂」のことであるが、かれら不生産階級の「原前拂」についてはなんら言及されておらず、「経済表」における不備となされている。また生産階級は、再生産過程の開始前に二〇億の貨幣を所持する。

(1) ケネーは、かかる関係を永遠の超歴史的な「自然的秩序」となした。かれの誤謬は、「ただ一定の歴史的社会的階級の物質的法則が、あらゆる社会形態を同様に支配する抽象的な法則として理解されているという点だけである。」 K. Marx;

Theorien, Bd. I, S. 43. 向坂訳、三七頁。このように「一定の歴史的な資本制的生産を超歴史的な自然的秩序として把握

する時、資本制的生産は、単に労働過程一般としてあらわれ、剰余価値は単なる素材的剰余即ち使用価値としてらわれる。かくして剰余はひとり農業においてのみ生じ工業においては素材の転形なるに止まりその増加がない。

(2) Quesnay: op. cit., pp. 310—311. 『全集』Ⅰ、二二五—二二六頁。

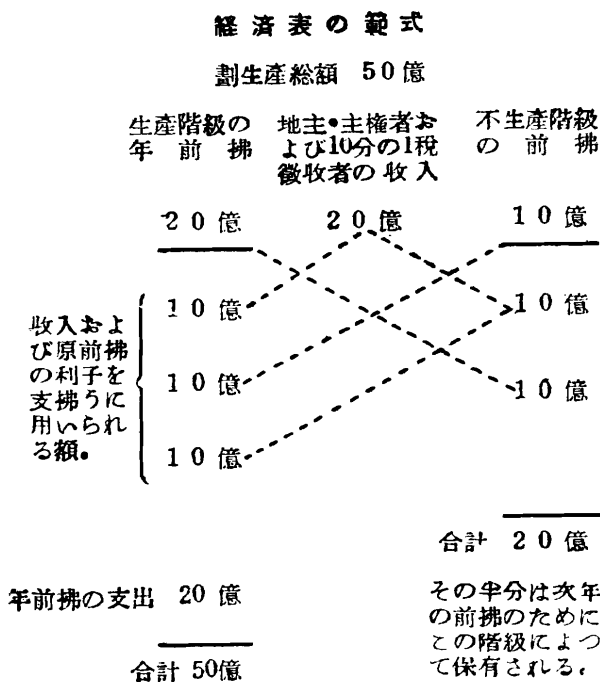
(3) この点について、堀新一氏は、不生産階級の一〇値は、ただに「年前払」のみでなく、少くとも「原前払」の利子に相当するものを含むものと解せらる。同氏「価値学説の展開と商業論」、三三三頁。

(4) この貨幣は、「農業生産物の転形した形態」である。それは、ただ「純生産物」を代位し、その価値を表現したにすぎず、以「後経済表」においては貨幣は単なる支払手段または購買手段として機能しているにすぎない。しかし貨幣が交換の媒介手段たるためには、それ自身すでに商品であり価値を有しなければならない。価値の保有者であるが故に一般的価値尺度として従ってまた一般的交換手段として機能することができ。支払手段または購買手段は、かかる機能を前提しそれに基づくものである。かくして、ロールも述べるが如く、「「経済表」の本領は、貨幣形態の背後における現物の流通であって、「経済表」は主として「純生産物」の使用価値の分配と再生産とを問題にしている」。これはケネーのみではない「重農主義者の翼々たる努力は、商品界の強調に向けられていた」(ウツグ)。しかし、「社会的再生産過程を理解するためには、社会が一定の生産手段および消費資料の他に、なお一定額の貨幣をも所有していることが前提されなければならない」。なんとになれば、物々交換に非ざる限り、商品交換には、それ自身価値を有する一般的価値尺度としてこの貨幣の存在が前提されねばならないからである。つまり、資本主義的商品生産が行われるためには、企業家において貨幣資本を前貸しすることが前提となっている。E. Roli: op. cit., p. 134. H. Wöge: op. cit., p. 1. Luxemburg: op. cit., S. 60 高山訳、七五頁

ところでケネーは、以上の如く、価値並に貨幣の本質を理解せず、従って貨幣資本の形成と作用とを分析しなかったのである。それは、金銀をもって富の唯一の形態とした重農主義の貨幣偏重への反動もあって、土地乃至農業をもって富の唯一の源泉と考えるという基本的テーゼに由来するものといえよう。即ち、ケネーは、貨幣をもって、「売上と買入への

間の仲介的担保 *un pape intermédiaire* たゞところの富」であるとなして、流通用具として極めて重視する。即ち、「貨幣は流通界における媒介的機能の遂行」(ウック)にその本質をもつ。しかし、貨幣は、「それ自身としては、何物をも生産せざるところの一の不生産的な富 *une richesse stérile*」であり、「一國民において売上と買入とのための用途およびそれを流通に再び投げ入れる収入および租税の支払のための用途以外の効用をもたぬ」ものである。それ故に、「一國において生産が増大しなければ、そのの貨幣も増加しない」「貨幣の多小によつて國家の富を判断してはならない」従つて、スペインは金錢を豊富に所有していたが貧困であり、これに反して、イギリスはその生産力に基いて眞実の富を所有していた、と考えるのである。眞の富の生産と分配に基礎をもたない貨幣は *an idle substance* である(ウック)。しかして、地主、不生産階級のもとに貨幣の滯留することは望ましくない。生産階級のもとにこれが還流しない時は、再生産の進行が阻害せられ、むしろ縮少再生産の過程を辿らしめる。流通の外にでいく貨幣は、遊資 *argent oisif* として積極的効用をもたないのみならず、生産階級の生産を阻害するものと考ええる。それが生産階級のもとにある時は、「年々の富を再生させるに必要な投資および経費に充てられる」からである。つまり、ケネーにあつては、貨幣は、直接農業生産に、従つて生産階級に捧げられた時のみ価値ありとなされ、資本ともなりうると考えられたのであつた。地主、不生産階級にあつてはかれらが農産物を購入する時に流通手段として作用するにすぎないものであつた。また、高利の國債、無益で荷厄介な商業、海運の如き危険な企業は、すべて富を再生するものでなく、これらへの投資から貨幣を保護しなければならないのである。なお、ケネーは、ミスと異なり、貨幣を固定資本と流動資本とから除外したのは正当であつた。ただかれは、資本がその運動中に貨幣形態をとることを明確に洞察できなかっただけである。Quesnay, op. cit., pp. 324—325, p. 348.『全集』③、二五四—二五六頁。坂田太郎「ケネー経済表以前の諸論稿」、三二九頁、高橋幸八郎『近代社会成立史論』一九四頁、久保田明光『生成過程』、二五九頁。G. Weyl, *The Physiocrats* (Encyclopedia of the Social Science, by E. R. A. Seligman, Vol. V) p. 353.

ケネーは、以上の前提のもとに行われる一國民經濟總体における年生産物の規則正しい再生産の過程を、「經濟表範式」として圖表の如く示している。



ケネーによれば、図表左側上方の生産階級の20億および右側上方の不生産階級の10億は、本年度の總生産を生ずるために前貸せられた資本を示すものであり、中央上方の20億は、地主階級の收入として本年度の再生産過程に投入せられる社会の純收入である。これが支出せられ、生産階級および不生産階級へ分配せられる。この地主階級の收入より左右に引かれた点線における額はその支出額である。また、生産階級間に引かれた三本の点線は、この兩階級相互間の交換を示すものであつて、その点線の終りにおける額は、相互に一が他より受取る額である。最下方の左右における合計は、生産並に不生産階級の收入の總計である²。しかして、左方生産階級の總收入が

年々の総生産額に等しいのは、以上の支出の分配が、既述の諸条件、即ち完全な自由競争、外國商業の捨象、物價の静止狀態等の如き條件の不行われる單純再生産を仮定したからであり、従つて、耕作、富、人口等には増減なく、もしもこれらの点に変化をきたす時には、自ら変化がなければならぬのである³。

(1) Quesnay, op. cit., p. 317. 「全集」Ⅱ、二二四頁。ケネーの見解の卓越さは、その「經濟表」が商品資本の循環を基礎とする点にある。「W...W'」（商品資本循環の一般的公式）は、ケネー「經濟表」の基礎をなすのであつて、かれがG...G'（重商主義が孤立させて固持した形態）に対立するこの形態をえらんで、P...Pをえらばなかつたのは、偉大で正確な腕前を示す。」K. Marx: Das Kapital, Bd. II, S. 95. 長谷部第二部、一三二頁。

(2) 「略表に」における再生産総額は、生産階級の側に五〇億、不生産階級の側に二〇億計七〇億であるが、ケネーは五〇億と見るのは誤謬である。

(3) Quesnay, op. cit., p. 316. 「全集」Ⅱ、二四三頁。

いま、ケネーが、「經濟表」において示そうとする社会諸階級間における年生産物の循環過程を要約するならば次の如くなるであらう。

生産階級は、流通の開始前に、五〇億の生産物の他に、二〇億の貨幣を所持する。この貨幣は、ただ「純生産物」を代位し、その價値を表現したものにすぎないものであつて、その後も單なる支拂または購買の手段として機能してゐる。即ち生産階級は、貨幣で二〇億を地代として地主階級に支拂う。これ支拂手段である。地主階級は、これをもつて生産階級から一〇億だけ食料品を買入れる。これ購買手段である。これによつて貨幣一〇億は生産階級に復歸し総生産物の五分の一は消費に歸する。地主階級は、残余の一〇億をもつて不生産階級から工業品を買入れる。この階級は、この貨幣一〇億をもつて生産階級から食料品を買入れる。これによつて、生産階級が地主階級に支拂つた貨幣

二〇億のうち第二の一〇億が回收され、それとともに総生産物の第二の五分の一が消費に帰する。これによつて不生産階級にあつては、流通の開始前に所有していた二〇億のうち、一〇億のうち、一〇億が食料品に轉化する。かくして生産階級は、不生産階級に支拂つた貨幣を全部回收した代りに、その所持する生産物は三〇億に減少した。不生産階級は残余一〇億だけを所持することとなる。次いで生産階級は、その回收した貨幣二〇億のうち一〇億をもつて、前年度に消耗せられた「原前拂」としての農器具その他の補償のために不生産階級から工業品一〇億を買入れる。これによつて不生産階級は、貨幣一〇億を取得するとともに第二の工業品一〇億を失う。しかし不生産階級は、この取得した一〇億をもつて前拂たる原料品その他來年度の生産手段として必要な生産手段を生産階級から買入れる。貨幣一〇億は再び生産階級に復歸する。ここにおいて、生産階級は、貨幣二〇億工業品一〇億の他、農業品二〇億を保有するこの農業品二〇億は、生産階級自身消費する生産物をあらわし、従つて流通に入らない。これは前年度の勞働の成果であつて、流通の開始前に天引せられるものである。やがて資本としての役立ちを再び開始する。かくして、年生産物以上の如き総過程の終りに當つて、生産階級は、工業品一〇億農業品二〇億の現物を保有する。この合計三〇億は、直接に生産階級の「年前拂」に使用せられる。

ここにおいて、「略表」左上方における「年前拂」は、單に年々消費せられる流動資本の要素のみならず、前年度において磨滅した固定資本の補填の要素をも表現するものと解しなければならない。そもそもケネー「經濟表の分析」における「原前拂」「年前拂」の區別は、固定資本、流動資本の交錯の上になされた規定であり、「原前拂」の中には流動資本の要素が、また「年前拂」の中には固定資本の要素たる農耕用の道具および役畜等も含まれていると解される¹。従つて、不生産階級から生産階級の「年前拂」に向う点線は、以上の如き生産階級の前拂資本のうち、固定資本部分における年損耗分の補填關係を、表示するものであり、それ故に、不生産階級より買入れる工業品一〇億は

「年前拂」における固定資本部分のみならず、「原前拂の一部をも補填するものと解するのがケネー「略表」のより正しい意味を伝えるものということができるであろう。² この固定資本部分における年損耗分の補填こそ「再生産の必要條件³」を構成するのである。

他方において、不生産階級は、原料品一〇億食料品一〇億を保有することができる。かくしてまた、次年度における同一規模の再生産の前提はすべて存在し、流通の諸條件はすべて守られ、再生産はその規則正しい進行をはじめることができることとなる。

- (1) K. Marx: *Theorien*, Bd. I, S. 89 向坂訳、九一頁。また、アダム・スミスはケネーの「原前払」と「年前払」の区別を固定資本とに一般化した⁴が、その説明に当って、先ず「年前払」について、「年支出とは、種子、農業用具の消耗および農業者の奴婢および家畜の、並にかれの家族の一部分にして耕作に使われている奴婢と考へうる限りの家族の、年々の維持費をいう」と述べ、「年前払」がげんみつな意味の流動資本ではなく、固定資本の要素をも包含していることを明言している。逆に、「原前払」の中に流動資本的要素を含ましている。マルクス並にステファン・パウエルも基本的にはかかる見解をとる。A. Smith op. cit., p. 629. 大内訳(三)四三九頁、S. Bauer: *Quesnay's Tableau Economique*, *The Economic Journal*, 1895, p. 13.

この点について、越村信三郎教授は、ケネー「略表」の不備を衡かれ、ケネーの意図に基く修正を施した後、「範式的分析第四表」としてこれを示される。それは最も事実に近いものであり、かつケネー「略表」の真の意味を伝えるものと主張せられる。要するに、前述の「年前払」二〇億は、農業の流動資本の要素のみならず、前年度に磨滅した固定資本の更新の要素をも表現していること。従って、「略表」左上方における「年前払」が原前払的要素をも含まなければならぬことを図示したものである。ただし、このばあい、マルクスの「剰余価値学説史」における叙述が「原前払」の利子といわれる

固定資本の年損耗分に略々相当するものが農業部門によって供給可能なるものとなされているのに反して、越村教授の「第四表」にあつては、その一部が不生産階級から買入れる工業品によって、補填されるものと解されている。納得的な説明である。マルクスの叙述は、ケネーの「分析」に基づくとなされているが、越村「第三表」は略々これに相当するであろう。ケネーにあつては、不生産階級から買入れる工業品が、「原前払」、「年前払」のうち、いずれを補填するかを明確に叙述していない点から考えても、ケネーの意図を以上の如く解するのがより妥当なものの思われる。

なお、久保田教授は、ケネー「略表」が「経済表の分析」の本文を図表化したものと異なること、また「要約」の図表化したものも、ケネー「略表」と異なること、むしろパウエルの「修正表」と同形であることを指摘される。しかし、不生産階級から買入れる工業品が「原前払」の利子のみを補填するものと解されているのは、パウエルの「修正表」と同一の批判を受けることとなるであろう。また、山田教授は、「原表」と「略表」の分析図によって、前者が精密であるが一断面を表示するにすぎないものであり、後者は一個の完成形態であることを示されている。両者の比較検討のために有益にして簡明な図表である。都留教授もケネー「略表」の図表化を試みられスウィージの著書に掲げられる。これ、シユムペーターの称讃してやまないものである。越村新三郎、前掲書、八〇—九二頁、久保田明光「フィジオクラシー」(新経済学全集所収)、五一—五三頁、山田盛太郎、前掲論文、二八—二九頁、P. M. Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*, 1946, pp. 365—367. J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, 1954, p. 239.

ところで、同じマルクスも、「反デューリング論」においては、固定資本、流動資本のげんみつな区別の上に立つて簡潔な説明を試みている。そこでは、「年前払」は、生産階級の内部で供給され、「原前払」の年損耗分は、不生産階級から買入れる工業品によって補填される。ただし、この場合には、農業の附属物としての家内工業が、食料品以外の自己の必需品のはほとんど大部分を調達していたことが前提されている。マル・エン選集第十四巻、四二—四三頁。しかして、オンケン「経済学説史」における叙述も、ケネー「分析」にのみ基くものとなされているが、ウッケによれば、オンケンはその「分析」

のデータさえも除外しているのであり、総じて、マルクスの簡潔さと正確さにはるかに及ばないのである。H. Wood: op. cit., p. 41.

(2) 越村信三郎、前掲書、八五頁。

(3) マルクス「反デユーリング論」前掲書、四二七頁。

しかして、ケネー「略表」における農業二〇億工業品一〇億の合計三〇億は、ケネーの想定する一大農業王國において、富の循環が支障なく行われるために必要欠くべからざる耕作費＝経営資本に他ならず、もしこれが、重商主義政策による恣意的課税によつて阻害せられるならば再生産の過程はもはや順調に進行することをえない。それ故に、「國民的再生産の直接的必要をならん顧みることなく」國民經濟總体において「処分可能な」disposable³ものは、總生産物五〇億から、この再生産に必要な経営資本三〇億を控除した残余の「純生産物」二〇億のみであることが明かである。これ資本の産物に他ならず、「國民の眞実の收入⁴」を形成する。かくして、ケネーは、資本の決定的役割を把握するのに成功するとともに、經濟學史上、資本理論にたいして「獨創的貢獻」(シユムベーター)をなしたのであつた。

(1) これは、ケネーによつて、生産階級の「回收」、「年支出」、「年回收」などと呼ばれる。Quenay; op. cit., p. 312.

全集(一)、二三九頁。既述の如く、この中に利潤が含まれていると解すべきであり、そしてそれが拡大再生産の契機となり「下から」の資本主義化の途を開拓するものであることは注目すべきである。

(2) マルクス「反デユーリング論」、前掲書、四二七頁。

(3) Quenay; op. cit., p. 350 「全集」Ⅱ、三五頁、この「処分可能な」ものが、「唯一の剰余価値」であるが、それが地代として土地所有者の手に帰する。ケネーにおいては、資本制的生産關係を前提しながら、剰余価値は生産階級でなく地主階級

に歸し、地主が資本家としてあらわれる。ここに土曜所有支配が見出される。それ故に、ケネー「経済表」は、「封建制度の、土地所有支配のブルジョア的再生産」と規定せられるところとなる。ここでは、資本制的生産が封建的外蘊を与えられよう。 K. Marx; *Theorien*, Bd. I. S. 41. 向坂訳、四二頁。

- (4) A. Gray; op. cit., p. 103 この「収入」Revenueなる語の二重の意味について Das Kapital, Bd. I. S. 621. 長谷部訳、九二〇頁参照。しかして、ケネーの見地からするならば、ひとたびこの「純生産物」消滅するや、工業は存立の地盤を失い、都市人口は農業に雇傭を求めことを余儀なくせられるであらう。

ケネー「経済表」は、年々の社会的生産物の再生産過程について、以上の如き構想を有するものであるが、それはまことに、わずか六つの生発点とを結びつける五行の線から成立する。それは、マルクスによつて経済学の幼年期における天才的着想であると稱揚され、またシュムペーターによつて経済現象分析のおどろくべき單純化をなしとげたものと意義づけられたのであつた。ただし「経済表」は、その形式の單純さと抽象的性格にも拘らず、生産階級の経営資本を中心として社会的総資本の再生産を考察する國民経済の全体的把握であり、さらには、資本主義社会すべての経済現象が不可分の全体を構成し、かつ相互依存關係を有することの見事な表現に他ならなかつたからである。また「経済表」は、「純生産物」という「処分可能な」、いわば一國民経済総体における純余剰の性格を簡明したところに、当時の絶対主義下フランスにおいて、生産機構保持のために欠くべからざる農業資本が強権的恣意的課税の重課によつて吸収され、農業衰退の促進的モメントをなしていたということに対する一定の批判的意義を有するものであつたのである。

既述の如く、重農主義は、ブルジョア化する地主層の階級利益と農業近代化の運動を理論的に代弁するものであつた。しかるに、フランス絶対主義下の重商主義政策は、農業の負担と犠牲とによる商工業偏重政策であり、要するに

封建貴族や独占商人、金融貴族等の前期的資本の専制配支の政策に他ならなかった¹。ここにおいて、農業資本主義化の推進者たるケネーは、農業経営資本の安全を阻害する恣意的課税等を廢止し、借地農の経営上の條件を確保しなければならぬと主張した。なんとすれば、借地農の富こそ、「國民の力と繁栄とをつくり上げる」ものと考えられたからであつた²。ケネーは、フランス絶対主義下の積弊をば合理的集約的な資本主義的大農経営の發達によつて除去しようとしたのである。かれは、かかる農業の最高度に行われる社会を自然的秩序の理想社会と想定し、これが實現を阻むところの苛酷な課税、封建的義務の強化、耕作農民の子弟の離村、穀物取引に關する諸制限の徹廢等を主張したのであつた。當時の租税体系こそ新農業發展の最大の障害をなしていたのである。かかる意味において、ケネー経済学の総括たる「経済表」は、まさしく、「経済外的な強力や特權階級の浪費に対する自然發秩序の抗弁」³であり、「時代に対する警鐘」⁴であつたと要約することができであろう。しかしながら、かかる主張を内包する重農主義体系もその思想の獨創性とその氣迫をもつてしても、一定の政治的限界と制約とを有するものであつたことはすでに述べたところである。

しかしして重農主義の人々は、ケネーを宗師となし、経済学史上、「他は類例を見ないような方法」で緊密な学派を形成した。ケネーこそ、この学派における唯一の創造的中心であつたのである。しかるに、この「略表」の成立とともに、かれの経済学はその發達の極点に達し、その後においては、多くは宗師の理論をめぐる註釋乃至補足敷衍あるのみであつてやがて⁵、アダム・スミス「國富論」出現すやその光彩を失ひ、十九世紀中葉に至るまでかれらの妥當な評價を受けなかつたといわれる⁶。

- (1) この点について、ロツシャーは要約を与える、「スユーリー主義とコルベール主義との対立進んでは、フイジオクラシーと

マーカントイル・システムとの対立は、主として田舎と都会とのより深刻な対立に基く」と。杉本栄一訳「英国経済学史論」・二五八頁。

- (2) 重農主義は、特定の階級利益を代辯するものであった。しかし、それはフランス一国の名の下に主張せられたのである。それ故、そこには、「資本および資本家階級の利益——資本制的生産——の発展は、近代社会における国民的力および国民的優越の基礎となったという意識」が見られる。K. Marx; *Das Kapital*, Bd. III, S. 835. 長谷部訳第三部 (F)・一一〇六頁。

- (3) 大河内一男「経済思想史」・七九頁。

- (4) 舞出長五郎、前掲書・七一頁。ところで地主のブルジョア化はなんら権力がブルジョアジーの手に移行したことを意味するものでない。ケネーは、政治的には絶対主義権力の力によってその理想を実現しようとする啓蒙専制主義の立場に立っていたことは既述の如くである。ここでは権力の本質は未だ地主の独裁であり、かかる封建地主が封建的土地所有を最大限に維持しつつ「上から」対応的にブルジョア化していったにすぎない。それ故に、他方における下からのブルジョア化があったにも拘らず、封建的土地所有の解体乃至廃棄は未解決の問題として残るであらう。

- (5) 「この経済表は、現代の学校における幾何学の定理のような確実さをもって、すべての門人達によって註釈され、弘められかつ発展せしめられた。人々は、これを、恰もその中で各階級の市民が、自己の属している社会階級の義務を学ばなければならぬ数理問答のごとくに、誦んじたのである」。重農主義の全分配理論はこの「経済表」に包含され、かくしてケネー学徒の著作は、それに対する註釈乃至補足にすぎないものとなったのである。J. A. Blanqui; *Histoire de l'Economie Politique en Europe*, 1837. 吉田啓一訳 (F) 六四頁。

- (6) 重農主義の租税論は、フランスで多くの追隨者をもった。また、フランス革命もその財政改革において重農主義思想の影響を受けたとされる。J. F. Bell; op. cit., p. 141. その後この重農主義の体系は、十九世紀の前半期にはそれに相応し

た地位を占めず、一八四六年デュール E. Daire による Physiocrates (Paris) の刊行以後妥当な評価がはじまった。

Gide=Risi: op. cit., p. 51., J. S. Lewinski: op. cit., p. 33. マルクスは、一八六三年七月七日、エンゲルス宛書翰において、再生産の「表」の草案を示している。それは、「ケネーの表に置き換えたもの」であつた。但し、マルクスはケネーと異なり、統計的資料をとり入れることはなかつた。さらに、一八六八年四月二十二日付けエンゲルス宛書翰は、この「表」から「表式」への転化を劃する一指標となつた。ケネー「經濟表」は、マルクスに至つてはじめて完全な解明を与えられたのみでなく、マルクス再生産論のうちに批判的に攝取されその再生産表式として揚棄され、ここに社会的總資本の再生産と流通にかんする理論は完成を見るに至つたのである。マルクスの再生産表式については、K. Marx: Das Kapital, Dietz=Ausgabe, 1953, Bd. II, SS. 532—544. 参照。

附記 本稿は講義の稿本であり、もとより覚書にすぎない。従つてこれで一応打切りたい。但し、ウググの著書については、全面的に検討する余裕もたなかつたので、別稿においてそれを果したいと思つてゐる。

(なお、六七頁の經濟表の)
範式の劃は再と訂正す。